第1問　同じ著者が書いた次の二つの作品（「人生の意味」、「社会」）を読んで、後の問い（問1～7）に答えよ。

「人生の意味」

過去や未来に捉われない自由な精神であるところの君は、今や、何をしてもいい。何をすることもできる。君は、完全に自由だ。君の自由を制限するような社会も規則も、そして、「神」も、存在してはいないとしたら、さあ、君は、何をする？

今本当にしたいこと、野球をするでも絵を描くでも、あるいは誰かと恋をするでもいい、あるいは何もしたいことがないのなら、何もしたくないことがしたいことだ。君は、自分がしたいことを何でもすることができるのだけれども、さて、「なぜ」君はそれをしたいと感じるのだろう。完全に自由で、何をしてもいいはずなのに、「なぜ」、よりによってそれを、無限の可能性のうちのたったひとつのそのことを、君はしたいことだと感じるのだろう。君は、自分の自由でそれを選んだと思っているけれども、ひょっとしたら、それを選ぶことは、君が選ぶ前から決められていたのじゃないだろうか。それは運命として決められていたのじゃないだろうか。だとしたら、「自由」なんてことも本当は存在しなくて、人間の人生は、すべてあらかじめ決められている運命なのじゃないだろうか。（中略）

昔から人間は、この非常に難しい問題に頭をひねってきた。運命か自由か、どちらと考えるかで、人生に対する心の構えは、まったく違ったものになるからだ。だいたいにおいて、運命論者はあきらめムード、自由意志派は元気なタイプが多いみたいだ。決まってるのだから仕方がないとあきらめるか、自分で決められるんだと決めてゆくかだ。でもここでこの両派がともに疑っていない前提をも、さらに疑って考えてみよう。そもそも、運命と自由とは、互いに対立するものなのだろうか。どちらと考えるかは、それこそその人の自由、つまり好みであるならば、なぜその人は、ある一方の方を好むのか、この当たり前の不思議から考えていってみよう。

君は、どうして自分はこうとしかできないのだろうと感じたことはないだろうか。性格や好み、ものの感じ方など、どうしてもあることが好きで、どうしてもあることは嫌いだ。それは親の影響もあるかもしれないけれど、それ以前に、気がついたらそうとしか感じられない自分だったと、思い当たるようなことがないだろうか。いや、君が君であるところのもともとの君は、じつは誰でもないのだったね。誰でもないところの君が、現実には、〇〇××という名前で、特定の性格や好みをもつところの君になっている。これはどういうことなのだろう。

もし生まれることを自分で意志したのでなければ、人生が自由なものであるはずがない。そもそも生まれたくなかったのかもしれないのに、死ぬまでは生きてゆくわけだからね。生きているということ自体が、（　A　）ことであるはずだ。でも、本来は誰でもないところの自分は、誰でもないのだから、完全に自由で、生まれないことも、別の両親のところに生まれることも意志できたのかもしれない。なのに、現実には、ある特定の両親のところに生まれた。するとこれは、ひょっとしたら自由意志なのではないだろうか。君は君の自由意志で、その両親の下に生まれることを決めたのじゃないだろうか。

とはいえ、自分が生まれることを意志した覚えなんかある人は、まずいないよね。でも、自分が好きで決めたことなのに、それがうまくいかなく

なると、そのことを忘れて、人のせいみたいにすることはあるだろ。好きで始めたお稽古ごとなんかがいやになってくると、難しいとか先生が悪いとか言って逃げようとするだろ。そんなふうに、生まれることも、本当は自分で意志しながら、意志したことを忘れているのかもしれないと考えることはできる。そして、好きで生まれたわけじゃない、あんな両親の下に生まれたのは運命だからしようがないって、生きることから逃げようとしてるのじゃないだろうか。

むろんのこと、現代の科学は、Bこんな考え方は認めはしない。科学にとっては、人間が生まれるということは、精子と卵子の結合であり、生まれた子供に自分という意識が宿るのはずっとあと、自由意志をもつのもその時からと決まっているからだ。なるほど、信仰を持たない人間にとっては、神様が人間の運命を決めているのではないのだから、これは一見人間の自由を尊重する考え方のようだ。しかし、裏返してみれば、これは完全な運命論なんだ。人がその性格や能力、顔かたちなのは、ＤＮＡ、両親のＤＮＡによって決定されているのだからどうしようもないと宣告しているからだ。それなら、どこに人間の自由など存在する余地があるだろう。

仮に、君の人生、君のあらゆる選択は、君のＤＮＡによってすべて決定されているとしよう。それでも、なぜ君のＤＮＡは、そのＤＮＡとして決定されているのかという問いは残る。それを決めたのは、「誰」、もしくは「何」なのか。

原点としての謎に戻ろう。君が君であるところのもともとの君は、誰でもない。何でもない。何でもないのだから、完全に自由だ。完全に自由であるところの君は、その自由によって、肉体をもってこの世に生まれることを選んだ。ある特定のＤＮＡをもって生まれることを選んだんだ。だから、運命として決定されているＤＮＡとは、君が君の自由で選んだものなんだ。さあ、運命と自由とは、どこが違うものであるだろう。運命と自由とはまったく同じもの、運命とは、自分の自由で創るものだとわかるだろう。（中略）

人生が存在することには、意味も理由もないと述べた。存在するということ自体が、意味も理由もない（ア）キセキ的な出来事だからだ。けれども、肉体をもって現実にこの人生を生きる限り、人はさまざまな出来事に出会い、そのつどの選択を迫られることになる。身近なところでは、学校に行こうか行くまいか、（イ）キョクタンなところでは、相手を殺すか殺されるか、自覚してみれば、一瞬一瞬が自分の自由による選択なんだ。その時、人は、何を基準にその選択を為すだろう。自由を制限する社会も規則も、そして「神」も、存在してはいないとしたら、人は何を基準に自分の行為を選択すればいいのだろう。

自分の選択、それ以外に基準はない。したいことを為し、したくないことを為さないだけだ。よいことを為せば、よいことになり、悪いことを為せば、悪いことになる。何もかもが、思った通りになる。それなら、基準は明らかじゃないか。善悪という基準、価値の基準は、自分の中に、自分の心に、明らかに存在しているじゃないか。だから、人生を生きるための価値は、やっぱり明らかに存在しているんだ。

どういうわけだか、この宇宙はそういうつくりになっている。「天網恢恢粗（てんもうかいかいそ）にして漏らさず」という中国の古い言い方を、人生の（ウ）ヒョウゴとして覚えてしまおう。天の網は広くて粗いようだけれども、悪事は必ず露見する、悪人には必ず天罰が下るという意味だ。（中略）（　Ｃ　）、罪の罰は、必ず自分に帰ってくる。なんのためかって、自分のためだ。それより自分が悪くならないように学ぶためだ。悪を為さずに善を為し、よりよく

なろうと学ぶこと、それが、存在することに意味のない人生を生きることの、本当は、意味なのかもしれない。人は、思うことで、何もかも思った通りにすることができるのだから、人生や苦しみに意味はないと思えば、人生や苦しみは意味のないものとなるし、人生や苦しみに意味はあると思えば、人生や苦しみは意味のあるものとなる。天は、この宇宙は、なんて公正にして平等なんだろう！（以下・略）

「社会」

…そもそも、その「社会」というのは何だろう。なるほど、複数の人の集まりというのが、社会というものの最も単純な（エ）テイギだけれども、人がそれを「社会」と言うとき、たいてい何かそれ以上の意味があるようだ。

（中略）

多くの人は、社会というものが、何かそのようなものとして存在していると漠然と思っている。でも、考えるということは、漠然と思うことではなくて、正確に知ることだ。さあ、「社会」というものを、その正確な形で思い浮かべてみよう。いや、社会というのではあまりにも漠然としているというのなら、学校でもいい。小さな社会としての「学校」というものを、正確な形で思い浮かべてみてごらん。これが学校ですと、明確に示してみてごらん。

君はまず、学校の校舎を思うかもしれない。でも、それは学校の校舎なのであって、それが学校なのではないね。次に君は、学校にいる人々、いく人かの先生とたくさんの生徒を思うかもしれない。でも、それは学校にいる人々なのであって、それが学校なのでもない。あるいは、学校の授業の風景や、規則の数々のことを思うだろうか。でもそれも、学校の授業や規則ではあっても、それが学校そのものというわけではない。じゃあ、これが学校だと言える何かを、目に見える形として示すことはできるだろうか。

できないね、すごくおかしなことだけど、「学校」なんてものを、目で見たことのある人はいないんだ。なのに人は、それが何か目に見える物のように、自分の外に、自分より先に、存在しているように思い、事実そのようにして毎日を生きている。「社会」というのもこれと同じなんだ。いや、「学校へ行く」とは言えても、「社会へ行く」とは言えないのだから、人が漠然と「社会」と言う時の曖昧さはそれ以上だ。「社会」なんて、いったいどこにどのように存在しているのだろう。

目に見えないのに存在するもの、それは思いや考えであるということに、これまでの章で気がついた。思いや考えのことを、ここではまとめて「観念」と呼ぶことにしよう。ちょっと難しく聞こえるけれども、決して難しく捉えないで下さい。こんなのはただの呼び名、つまり君がいつも思ったり考えたりしているそれのことです。

で、「社会」というのは、明らかにひとつの「観念」であって、決して物のように自分の外に存在している何かじゃない。だって、何かを思ったり考えたりしているのは自分でしかないのだから、どうしてそれが「自分の外」に存在しているはずがあるだろう。「社会」は、観念として、自分や皆の「内に」存在しているものなんだ。いや、「内・外」という言い方は、「自分」を考えるとあり得ないということも先にわかったね。物のように外に

存在しているかのように思われる「社会」、社会という現実は、皆が内で思っているその観念の、外への現われだ。観念が現実を作っているのであって、決してその逆じゃないんだ。

このことに気がつくことはすごく大事なことで、うまくこれに気がつくことができると、すべてがそんなふうにできあがっているということもわかるはずだ。「社会」なんてものを目で見た人はいないのに、人はそれが何か自分の外に、自分より先に、存在するものだと思っている。思い込んでいるんだ。それが自分や皆でそう思っているだけの観念だということを忘れて、考えることをしていないから、思い込むことになるんだね。でも、自分の外に存在しているかのように思われる社会というものを、それならよく見てごらん。その社会に存在しているのは、やっぱり同じように思い込んでいる人々がいるばかりじゃないか。その人々の集まりのことを、「社会」と呼んでいるだけじゃないか。

「ない」のに「ある」と思い込まれたものは、当然あることになる。自分の外に物のようにある社会は、当然自分に対立してあると思われることになる。社会は個人を規制するわずらわしいもの、個人主義のあの彼の捉え方だ。その（イ）キョクタンなのが、わかるね、自分に都合が悪いことはすべて、「社会が悪い」「社会のせいだ」というあの態度だ。でも、社会が自分の外にあると思っているのは、他でもないその人だ。自分でそう思い込んでいるだけなのに、じゃあその人はいったい何を責め、誰が悪いと言ってることになるのだろう。

（Ｄ）何でもすぐ他人のせいにするその態度を変えるべきなんだ。だって、すべての人が他人のせいにし合っている社会が、よい社会であるわけがないじゃないか。社会は、それぞれの人の内の観念以外のものではないのだから、それぞれの人がよくなる以外に、社会をよくする方法なんてあるわけがないんだ。現実を作っているのは観念だ。観念が変わらなければ現実は変わらないんだ。社会のせいにできることなんか何があるだろう。

世のすべては人々の観念が作り出しているもの、その意味では、すべては幻想と言っていい。このことを、しっかりと自覚できるようになろう。社会がそうなら、国家というものもそうなんだ。E「日本」という国が、国旗や国歌や国土以外のものとして存在しているのを、君は見たことがあるかい。それらは、日本の国旗、日本の国歌、日本の国土であって、その日本なんて、どこにもない。人々の観念の内にしかない。なのに人は、「日本」という国家が、外に物のように存在していると思って、それが観念であるということを忘れて、その観念のために命を賭けて戦争したりするわけだ。ある角度からみると、これはとても不思議なことだ。観念のために命を捨てるなんて芸当ができるのは、生物のうちでも人間だけだからだ。もともとの自分は誰でもなく、たまたま日本という国に生まれたから日本人なんだということを自覚している君なら、このことがよくわかるだろう。

（以下・略）

（池田晶子『14歳からの哲学―考えるための教科書―』所収「人生の意味［2］」「社会」よりそれぞれ部分）

問1　傍線部（ア）～（エ）の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 1 ～ 4

1

（ア）キセキ

① 昔、ここにはセキショがあった。
② 明日は、カイセキ料理を食べる予定だ。
③ 彼のヒッセキに似ている。
④ 社長は、インセキ辞任したよ。
⑤ 人類の歴史は、膨大な知識のシュウセキの上に成り立っている。

2

（イ）キョクタン

① この技術にはカンタンせざるを得ない。
② タンレンを重ねる。
③ タンラク的に物事を考えてはいけない。
④ 土地をタンポにする。
⑤ 彼はタンセイな顔立ちをしている。

3

（ウ）ヒョウゴ

① ショウヒョウ登録は早めにした方がよい。
② 政治家のヒョウデンは、地元の地域である。
③ 彼は、一昼夜、ヒョウリュウしていたらしい。
④ この映画のヒョウバンを聞いた。
⑤ 英語のヒョウキを確認してください。

4

（エ）テイギ

① 食事中のギョウギが悪い。
② 今回のギケツの有効性が確認された。
③ 私の好きなギキョクが流れてきた。
④ この昆虫は、ギソウが得意だ。
⑤ 彼は、ギリ堅い人間だ。

問2　空欄Aに当てはまる最も適当な語句を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 5

① 自由な
② 不自由な
③ 運命的な
④ 特別な
⑤ 意識的な

問3　傍線部B「こんな考え方」に最も当てはまらない選択肢を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6

① 人間が生まれるということは、精子と卵子の結合であるという考え方
② 両親から生まれたのは、自分の運命だという考え方
③ 自分の意志で両親から生まれてきたという考え方
④ 自分の意志で両親から生まれてきたかもしれないが、それを覚えていることはできないという考え方
⑤ 好きで始めたお稽古ごとなのだから、やめてはいけないという考え方

問4　空欄Cに当てはまる最も適当な四字熟語を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7

① 信賞必罰
② 一罰百戒
③ 因果応報
④ 勧善懲悪
⑤ 四苦八苦

問5　空欄Dに入る文章として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8

① 社会を変えようとするよりも先に、人間が変わるべきなんだとわかるね。
② 自分を変えようとするよりも先に、社会を変えるべきなんだとわかるね。
③ 他人を変えようとするよりも先に、自分が変わるべきなんだとわかるね。
④ 自分を変えようとするよりも先に、他人が変わるべきなんだとわかるね。
⑤ 社会を変えようとするよりも先に、自分が変わるべきなんだとわかるね。

問6　傍線部Eについて、筆者の考え方と最も近いものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 9

① 日本は国旗や国歌、国土から成っているのだから、それらを大切にするべきだ。
② 日本はどこにも存在しない観念的なものなのだから、そのために戦争するなど、ばかげている。
③ 日本を論じる前に、その前提である日本とは何かを考えるべきだ。
④ 日本という国にたまたま生まれただけなのだから、あまり日本にこだわるべきではない。
⑤ 日本とは、肯定したり、否定したりすることができない存在である。

問7　二つの文章全体を通して、筆者の立場に近いと考えられる哲学的立場を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 10

① 物質が根源であり、精神や意識も物質的現象であるという唯物論的立場
② 真に存在するのは個々のものだけであって、「社会」や「人間」のようなものは便宜上の名前や記号に過ぎないと考える唯心論的立場
③ 「社会」や「人間」といった普遍的なものとしての概念が実際に存在すると考える実念論的立場
④ 物事の存在や性質を、それが「何のためにあるのか」「何のためにそうなのか」という目的の観点から説明する目的論的立場
⑤ 物質の客観的存在を否定し、認識や思考といった観念が現実を規定すると考える観念論的立場

第2問　次の文章を読んで、後の問い（問1～7）に答えよ。

「笑う門には福きたる」という上方の諺（ことわざ）がある。ニコニコ笑っている家には福運がおとずれるということだ。

人間は喜びをもとめ、悲しみを避ける。それは万国共通の人情ではあるが、笑いというと、これはもう「A文化的」なものだ。うれしいからかならず笑うというものでもないし、悲しいから泣くというものでもない。喜びの感情と笑いの表現とは直線的にはつながらない。一国の文化の特徴がしみついた表情が、それぞれのお国柄の笑いをつくる。

笑いはかならずしも国境をこえない。イギリス人ならけっして笑わないことでも私たちが笑いころげることはあるし、その逆もまたありうる。また、日本人の笑いといっても、一様ではない。地方ごとに微妙な差があるし、年齢によっても笑いの質がちがう。箸のこけたのを見てもゲラゲラ笑っている娘たちを、老人はいぶかしげに、ときには不愉快そうに見る、といったあんばいだ。

笑いは複雑な人間的表情である。だからこそ、笑いの理論といったものも、なかなか一定にさだまりにくいのである。たとえばベルグソンの有名な笑いの説も、こわばりということを嫌う「生の哲学」から編みだされたもので、一説としておもしろいが、どこの国のどの笑いにも通用すると考えてはいけない。

ここでは笑い一般についての原理を追求するわけにはゆかない。笑いと福とにかかわるごく狭い面についてのみ、考えてゆきたい。私たちが「笑う門には福きたる」というばあい、どうして笑いを福とむすびつけて思いうかべるのか。B笑いはなぜ幸福をもたらすのか、という問題である。

＊

福というと、それはただちに七福神の連想をともなうが、福神そのものがニコニコ笑っているとはかぎらないと指摘したのは柳田国男であった。能狂言の「大黒」などはとうてい七福神の一つとは思われぬ顔をしているし、「毘沙門天（びしゃもん）」などは何ともいえぬきつい顔をしている。

柳田説によると、神は気むずかしいのである。なかなか笑ってくれない。そこで何とか人間が努力工夫して神に笑ってもらおうとする。そこのところを彼はこう書いている。「昔の日本人は勇猛不屈であったが、神に対してのみは一目を置き、しかも神によっては御気が荒く、斟酌（しんしゃく）も無く罰したまう神があった。十分なる帰伏の意を表し、怒をなだめ御機嫌を取る為には、人として一番（ア）シンボウのし易いのは、『笑って貰う』ことであった」（「笑の文学の起源」）

神に笑ってもらう――。その神の笑いは優越の笑いである。何と馬鹿な奴だと笑う。すると、神の力がみち、神はなごむ。そこが「笑ってもらう」人間のつけ目なのだ。「笑われる」というのは嫌なことなのだが、神の御機嫌をとるためならしかたがない。損して得とる、というわけだ。人間すべてa（　　）となるわけだ。

劣敗者を笑う優越の笑いのこの性格は東西ともに変らない。ただ、西洋では、その攻撃的性格がとりわけ強調され、人の弱点をつく諷刺（ふうし）の笑いとなって（イ）ケツジツする。rire amer というフランス語はそのまま訳せば苦笑いということだが、日本語でいう自嘲的な笑いよりむしろ、しんらつ

な攻撃的な笑いという意味で使われることのほうが多い。ところが、私たちの国では、とくに時代がさがり文化が複雑になるにつれ、人に笑われまいとする防禦的性格のほうが優勢を占める。

そこで、これはあの有名な「恥の文化」ということとつながってゆくわけだが、しかし、古代の笑いと近現代の笑いとは少なくとも区別して考える必要がある。古代の日本人は近現代のわれわれより、ずっと（ウ）エンリョエシャクなく笑っていた。つまり、敵を劣敗者として嘲笑うことで、味方の勇気を（エ）コブし、自分も元気づく、そういう笑いが一般的であった。

笑いは元気であり、活気である。もちろんうれしいから笑うということもあるが、逆に、笑っていると元気がつき、活気がでてくるという面もある。このあとの方が笑いの本義なのではないか。

笑いは人間に不可欠の、原初的な健康法である。小むずかしい議論をする、するとこれは肩が凝るという表現で斥けられる。そんな議論より、漫才や落語のほうが肩が凝らなくていいと言われる。この「肩が凝る」というのは、事の本質をついたうまい表現だ。物を考えるというのは辛いことだ。何となく気勢がそがれるのである。それに反し、ただわけもなく笑えるというのは愉しいことであり、人を活気づけるもととなる。

私たちは何とか人を傷つけず、傷つけられず、大イニ笑エル機会を待ち望んでいるのである。しかし、現実には笑うことで対人関係がまずくなることが多い。劣敗者には劣敗者の人権がある、ということを考えだすと、無邪気に笑ってはいられなくなる。子供は残酷だ、というのは、子供は遠慮なく劣敗者を笑う残酷な無邪気さをもっているからである。

そこでわれわれ大人は、神には遠慮なく笑ってもらい、そのおこぼれで私たちも共笑いをしようということになる。柳田説のように、神の前にへりくだり、笑われ者になるという意識はむしろまれであって、この「共笑い」という意識のほうが、もっと一般的なのではなかろうか。

＊

「古事記」の天岩屋神話は私たちの笑いの原構造を示している。八百万の神々はアマテラスに笑ってもらわなくてはこまる。太陽の光が輝いてもらわねばこまるのである。そこで、まず、自分たちが大いに笑う。それにつられてアマテラスが岩屋の戸のすきまをちょっとあける、ということになる。これは神に託した共笑いの心理であろう。

b（　　）一ばん笑ってほしいのは神である。c（　　）、太陽の神である。太陽が笑わなければ一切の生産はとまってしまう。d（　　）、その神に笑ってもらうためには、自分を劣弱者として卑下するよりも、e（　　）、はじめにこちらがC哄笑することである。それにつられて神が笑うという筋書となる。

ところで、この哄笑のきっかけとなるのはアメノウズメの全裸にちかい舞姿である。これは劣弱者にたいする笑いであろうか。そうではない。性にまつわることが哄笑をさそうのは、太古の心性をもちえている諸国民に共通のことがらであって、性は、人間の元気、活気、生産といったことに深くむすびついている。これが人類の、そして私たち日本人の根源の笑いである。こうした根源の笑いを共に笑うことで、太陽の光もかがやき、人びとは全身に活気のみなぎるのを感じる。

たしかに、笑う門には福がやってくる。

笑いは性、および生そのものと深くかかわっている。笑いは生をかきたてるものである。人が笑おうとするとき、その笑いの方向性は彼のもつ生の意味に深くつきささっている。もし人が美しい笑い、大らかな笑いを笑いえたなら、その人の生は、美しく、大らかなものであろう。しかし、笑おうとする意志と、笑いが目ざす生そのものとの間に亀裂のあるとき、笑いは奇妙にこわばったものになる。三島由紀夫の高笑いにはどこか不自然なものがあったという指摘をみたとき、私は卜胸(とむね)※をつかれたのであった。

（多田道太郎『しぐさの日本文化』一部改変）

※　胸を強めていう語。「卜胸をつく」は驚いてどきっとすること。

問1　傍線部（ア）～（エ）の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 11 ～ 14

11

（ア）シンボウ

① 彼はシンショウボウダイに語ることが多い。
② 綺麗なホウソウシに包まれていた。
③ 大学生活へのホウフを述べる。
④ ボウカンシャの立場で参加している。
⑤ ピカソの画風をモホウしている。

12

（イ）ケツジツ

① レポートをカンケツにまとめる。
② 彼はケツイを表明した。
③ 彼はカンゼンムケツのヒーローだ。
④ そのデパートは駅にチョッケツしている。
⑤ ケツエキがなかなか止まらない。

13

（ウ）エンリョエシャク

① 誠実さが彼のトリエである。
② 好きな人の前でミエを張ってしまった。
③ 彼のチエを借りて問題を解決した。
④ ネットではイラストレーターをエシと呼んでいる。
⑤ 剣道の奥義をエトクした。

14

（エ）コブ

① 服喪のためカブオンギョクは自粛された。
② 仕方なく彼とショウブすることになった。
③ バイトの賃金はブアイセイになっている。
④ この高校はブンブリョウドウを掲げている。
⑤ イベントはブジに終了した。

問2　傍線部A「文化的」の文中の意味と反対の意味をもつと考えられる最も適切な語句を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 15

① 未開な
② 普遍的
③ 粗暴な
④ 習慣的
⑤ 原始的

問3　傍線部B「笑いはなぜ幸福をもたらすのか」について筆者の考えとして最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 16

① 笑うことで神の機嫌をとることができるから。
② 笑うことで優越感を得ることができるから。
③ 笑うことで元気がつき、活気がでてくるから。
④ 神と一緒に笑うことで神との一体感が高まるから。
⑤ 笑うことは愉しいことだから。

問４　ａ（　　）に入る語句として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 17

① 神のタイコ持ち
② 神のしもべ
③ 神に見下された者
④ 神のカバン持ち
⑤ 神に守られる者

問５　ｂ（　　）、ｃ（　　）、ｄ（　　）、ｅ（　　）、に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 18

① ｂとりわけ、ｃむしろ、　ｄしかし、　ｅたしかに
② ｂたしかに、ｃむしろ、　ｄとりわけ、ｅしかし
③ ｂしかし、　ｃとりわけ、ｄたしかに、ｅむしろ
④ ｂむしろ、　ｃたしかに、ｄしかし、　ｅとりわけ
⑤ ｂたしかに、ｃとりわけ、ｄしかし、　ｅむしろ

問６　傍線部Ｃ「哄笑する」の意味として最も適当な語句を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 19

① からかうように笑う
② ひっそりと笑う
③ 見下すように笑う
④ 大声で笑う
⑤ 無邪気に笑う

問7　本文中で論じられていないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 20

① 古代の日本人は、相手を嘲笑うことが多かった。
② 人が哄笑することで、神も一緒になって笑うと考えている。
③ 日本の文化では、人に笑われることを恥ととらえている。
④ 笑い合うことで対人関係がうまくいくようになる。
⑤ 昔の日本人は、気むずかしい神の御機嫌を取るために、神に優越の笑いをして貰おうとした。

2026 年度　一般選抜 I 期　国語「現代の国語」及び「言語文化（古文、漢文を除く。）」

問題番号	設問		解答番号	正解
第 1 問	問 1	ア	1	3
		イ	2	5
		ウ	3	1
		エ	4	5
	問 2		5	2
	問 3		6	1
	問 4		7	3
	問 5		8	5
	問 6		9	3
	問 7		10	5
第 2 問	問 1	ア	11	3
		イ	12	4
		ウ	13	5
		エ	14	1
	問 2		15	2
	問 3		16	3
	問 4		17	1
	問 5		18	5
	問 6		19	4
	問 7		20	4